《修士論文要旨》

洞院実世の研究

―後醍醐天皇側近の人生―

近藤淳司*

「はじめに」で洞院実世について研究者がいないこと史料が少ないこと、そしてその一端が父洞院公賢の人物としての大きさにあることを前置きし、その研究の必要性について述べる。

第一章では洞院家内部における嫡流争いについて考察する。他家と洞院家の嫡流争いは全く異なるとし、公賢・公敏・公泰兄弟と実世・実守・実夏兄弟の嫡流争いについて述べる。洞院家独特の嫡流争いは当主がまず全派閥に一族を配置して嫡流争いがそこから始まるものとし、他家のように一族の中に有力な二家が両皇統に分裂して二派閥に分裂するのではなく、洞院家は派閥の数だけ分裂する。公賢兄弟の時代は持明院統・亀山法皇・後宇多上皇の三派閥が存在し、実世兄弟の時代は持明院統・後醍醐天皇・邦良親王・恒明親王の四派閥が存在し、実世は後醍醐天皇の派閥に属していたと考える。

第二章第1節では鎌倉末期の後醍醐天皇による記録所と検非違使別当について考察する。記録所の重要性と洞院実世がどのように関わっていたかである。記録所に関しては京都の商業・流通・訴訟の支配が最大目的であり、公的性格を持つ機関でありながら後醍醐天皇側近が集められ事実上の私的機関となり、六波羅探題の京都支配に干渉した。洞院実世も当然重臣の中に存在し、重臣は母や側室と血縁がある者に限られていることから阿野廉子とのつながりで直接信任されていたと考える。また、検非違使別当では親政開始以降の補任者で下級公家と死亡者を除くと南朝の上級公家である北畠親房・四条隆資・洞院実世の三人が残る。三人は後醍醐天皇側室の近親者であり、検非違使を手足のように動すには近親者でなければならなかったと考えられる。

第2節では後醍醐天皇の討幕計画の中で洞院実世がなぜ元弘の乱に加わらなかったのか考察する。実世は後醍醐天皇が出京した翌日に捕らえられる。補縛の理由は後醍醐天皇重臣だからであろうが、なぜ京都に残ったのか。持明院統派の洞院公賢から幕府に情報が漏れるのを防ぐために知らされなかったと考える。六波羅探題に捕まっていた実世は翌年父公賢に預けられ、公賢邸で幕府が倒れるまで軟禁となったと考えられる。

第三章第1節では洞院実世の建武の新政への参加について考察する。実世は建武政権下で恩賞方上卿・伝奏・雑訴決断所寄人に任じられる。恩賞方上卿については恩賞方がまだ機関として未成立の中で実世は上卿に任じられ、当然ながら全国から来る恩賞の要求をさばくこ

平成21年度　*文学研究科文化財史料学専攻

とができずに解任される。後任者も当然さばくことができず次々と解任されていく。この恩賞決定の遅さが武家の反乱の最大の一因とされる。雑訴決断所寄人については実世は増員時に加わり、全国から来る訴訟の処理を行っていく。後醍醐天皇が公家支配の時代に回帰しようとしたために訴訟の数は圧倒的なものとなってしまい、恩賞に続き訴訟まで時間がかかることになった。伝奏については天皇と武家の間のつなぎの機関であり、武家が天皇に会うとなると伝奏を待つことになった。ただし、伝奏のみに関する史料はなく実世が伝奏としてどのようなことをしていたかははっきりしない。

第2節では足利尊氏の反乱と討伐について考察する。中先代の乱の後足利尊氏が北条時行を討伐して鎌倉にいすわり、その間に足利直義が護良親王を殺害したことが伝わると足利尊氏討伐軍が構成される。新田義貞らが東海道から、洞院実世らが東山道から鎌倉を目指すことになる。鎌倉にとどまっているはずもない足利尊氏を討伐するために実世は西国武士と新田一族で構成される東山道軍を率いて信濃へと進軍し、信濃を掃討する。一方、東海道軍は破れ、京都は足利尊氏によって支配されるが、北畠顕家の奥州軍、洞院実世の東山道軍が合流し、足利尊氏を京都から追放する。京都では勲功賞が与えられ、洞院実世も自軍に軍忠状を発給した。

第3節では足利尊氏の再上洛と洞院実世らの北国落ちについて考察する。足利尊氏は九州で勢力を盛り返し、厳島で光厳上皇院宣を手に入れ、湊川で楠木正成を破り、入京する。後醍醐天皇らは比叡山に移り、五ヶ月にわたって京都奪還戦を繰り返し、名和長年や千種忠顕は戦死する。戦力も食料も失われ後醍醐天皇の下山が決定すると新田義貞は猛反対し、恒良親王を奉じて尊良親王・新田義貞・洞院実世らが北国に落ちることが決定される。またこのときに恒良親王が即位したともされ、北国軍は恒良親王を天皇として推戴した。

第四章第1節では金ヶ崎の戦と吉野への帰路について考察する。越前金崎城に入った北国軍は膨大な軍勢と戦うことになる。北国軍は恒良親王を天皇であると信じ込んでいることから、洞院実世が伝奏となり綸旨を発給し、白鹿という年号を使用した。金崎城近くの気比社は恒良親王が臨幸してきたと記し、朝廷のような行動を始めていたと考える。その金崎城も四ヶ月で陥落し、洞院実世は新田義貞・脇屋義助と共に越前杣山城に脱出する。二年半ほど杣山城にいた実世は杣山城の陥落で美濃根尾城に移り、すぐに尾張波津ヶ崎城に移り、伊勢・伊賀を経て吉野に帰還したと考えられる。

第2節では後村上天皇の伝奏について考察する。伝奏は天皇武家の間をつなぐ機関で摂関に次ぐ機関であることから公家優位の南朝では当然上位の存在となり、この上に関白が機能していなければ最上位の機関となる。四条隆資と洞院実世は伝奏に補任されることによって南朝の思想の最上位にいる北畠親房に次ぐ権力を持つことになった。北畠親房と伝奏が国内の南朝への協力要請の文書を発給しているのである。南朝の最重要機関武者所でも南朝重鎮の署判は伝奏のものであり、聴断でも上位に伝奏の署判がある。正平一統がなると後村上天皇還幸

の沙汰を行い、正平一統が崩れて京都を脱出すると四条隆資の戦死により隆資に代わって文書発給を行い始める。内大臣に補任すると伝奏としての行動は見られなくなり、以降没するまでの六年間で左大臣兼東宮傅までのぼる。

第3節では「戦う公家」について考察する。「戦う公家」というのは南朝公家の特徴であり、主な条件に、一、戦力を率いて前線に立ち戦闘に加わる、二、嫡子以外の一族を部下として扱い家臣団を構築する、の二つを置いている。北畠家・四条家はまさに当てはまるが洞院実世は戦闘に加わるものの家臣団を構築できなかった。唯一の男子公行は出家してしまう。実世は「戦う公家」になりきれなかった。

「おわりに」でこれまで論じてきたことにより洞院実世がなぜ研究されてこなかったのか、研究を深めるにはどのような方向性が必要であるかを述べる。洞院実世が共に行動している人物の陰になって同じ行動をしているにもかかわらず記されてないのであれば、その人物の行動が反映できるということであり、その人物の歴史も研究することで実世の研究は確実な方へと向かわせることができる。